

第42回 東京芸術文化評議会 速記録

- 1 日 時 令和8年5月25日（月曜日）14時01分から14時58分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、秋元評議員、片岡評議員、是枝評議員、妹島評議員、
芹澤評議員、日比野評議員、松任谷評議員、宮城評議員、山田評議員、
小池知事
- 4 報 告 芸術文化を取り巻く概況、これまでの文化施策の経緯、進行中の主な
取組、都立文化施設の次期指定管理
- 5 議 事 芸術文化のハブ機能の強化

6 発言内容

○青柳会長 それでは、ただいまより、第42回の東京芸術文化評議会を開催したいと思います。

皆様、お忙しい中、御出席いただき、ありがとうございます。

本日は、会場の座席表に従って、まず五十音順で評議員の方々を御紹介申し上げたいと思います。

まず、片岡真実評議員です。

○片岡評議員 （一礼）

○青柳会長 妹島和世評議員です。どうも。

○妹島評議員 （一礼）

○青柳会長 それから、日比野克彦評議員です。

○日比野評議員 （一礼）

○青柳会長 また、オンライン上で御参加の評議員の方々を御紹介申し上げたいと思います。

まず、秋元康評議員です。

○秋元評議員 よろしくお願ひします。

○青柳会長 それから、是枝裕和評議員です。

○是枝評議員 よろしくお願ひします。

○青柳会長 芹澤ゆう評議員です。

○芹澤評議員 パリから入っております。

○青柳会長 それから、松任谷正隆評議員です。

○松任谷評議員 お願いします。

○青柳会長 それから、宮城聡評議員です。

○宮城評議員 よろしくお願ひします。

○青柳会長 山田和樹評議員です。

○山田評議員 山田和樹です。お願いします。

○青柳会長 どうも。

最後に、本日の進行を務める青柳でございます。

なお、コシノヒロコ評議員は、東京都現代美術館にて明日から開催される展覧会の内覧会により、御欠席となっております。

それでは、早速でございますが、ここで小池知事から御挨拶をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○小池知事 皆様、こんにちは。小池でございます。

本日は皆様方に御出席いただき、誠にありがとうございます。

評議員の皆様方から、これまで様々な御意見を頂戴してまいりました。心から感謝を申し上げます。また、今回お目にかかることができうれしく思います。

是枝さんはカンヌからですか、これはひょっとして。

○是枝評議員 今朝戻りました。

○小池知事 そうなんですか。はい。ありがとうございます。

申すまでもございませんが、芸術文化はもう成熟した都市に欠かせない社会インフラだと考えております。そして、それが今、東京の大きな強みになっております。

東京は伝統と革新が共存する奥深い魅力がございます。そして、今年の3月の末に、4年間かかりました改修を経まして、江戸東京博物館、両国にございます。リニューアルオープンいたしましたところ、既に26万人の方々にお越しいただいて、大変な人気を博しているところでございます。

そして、来月には、有形・無形の江戸文化の魅力を一体的に発信をするEdo Tokyoキャンペーンがスタートいたします。

こうした取組を通じて、国内外に江戸文化の魅力、これをアピールをしていきたいと考えております。

さらには10月から12月にかけて、今度は、秋冬の東京を彩ります国際文化芸術祭、ARTE TOKYO、初めての開催となります。アートを軸にいたしまして、エンタメ、演劇、音楽、そして、イルミネーションなど、様々な文化が交わることによって、新たな体験を生み出す試みとなっております。

本日はこのような幾つもの課題がございますが、今年の主な取組をはじめとして、東京が進める様々な芸術文化施策につきまして、忌憚のない御意見を頂戴したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

それでは、次第に沿って進めてまいりたいと思っております。

なお、本日の議事は公開とし、後日、資料や議事録を公開したいと思います。

それでは、まず最初に、本日の報告事項ですけれども、時間の都合上、議事までまとめて、事務局のほうから説明をよろしくお願ひしたいと思います。その後で、評議員の皆様から御意見を頂戴したいと思います。よろしくお願ひいたします。

○文化振興部長 それでは、本日の報告事項及び議事につきまして、資料の御説明をいたします。お手元のタブレットを御覧ください。

まず、報告事項です。

都は、「東京文化戦略2030」を策定し、文化施策を充実させてきたところでございます。「世界の都市総合力ランキング」において、昨年、東京が初めて2位を獲得いたしました。また、都民やアーティスト等を対象とした意識調査では、2021年と比較した5年間で、若者の鑑賞割合やアーティストからの制作環境の評価なども高まっています。

今後もコロナ禍で構築してきたネットワークや、国際イベントでの文化プログラムで培ったノウハウを生かし、新たな文化施策を推進してまいります。

現在進行中の主な取組です。

まず、ARTE TOKYOです。本芸術祭は、秋から冬にかけて東京で催されるアート、演劇、エンタメなど、多彩なプログラムを結び合わせ、都市全体の魅力として描き出すものです。芸術文化プロモーション部会に御助言をいただきながら、ARTEの認知拡大と集客策を効果的に展開していきます。

続きまして、国際美術展、TOKYO ATLASです。ARTE TOKYOの臨海エリアにおける中心プログラムとなります。世界の第一線で活躍するアーティストによる屋外展示とともに、都が支援してきた若手アーティストの特別展を開催いたします。

続いて、江戸文化の魅力発信についてです。江戸文化の魅力発信部会におきまして、世界遺産を見据えて、個々の文化資源の価値を整理してまいりました。また、昨年度は、東京に世界の注目が集まった世界陸上や東京マラソンEXPOといった機会、江戸文化の魅力を発信してまいりました。

今年度は、Edo Tokyoキャンペーンとしまして、春夏秋冬の季節ごとに、祭り、花火などのテーマを決め、江戸関連行事等の開催時期に合わせて、区市町村や伝統芸能団体等と連携し、一体的に発信してまいります。

続いて、子供の文化体験の充実としまして、TOKYOカルチャーデビューです。33の企業・団体から御賛同いただいております。今年度は、文化体験の入り口となる多彩な分野を集めたフェスティバルを開催いたします。

賛同企業の皆様と共に作成しましたカルチャーデビューのステートメントと、これを基にデザインしたロゴでございます。「手」をモチーフに、子供たちを包み込むイメージ、同時に新たな若葉が芽生えるイメージを表しています。

また、ネクスト・クリエイション・プログラムとしまして、是枝評議員、コシノ評議員にも御協力を賜りながら、第一線で活躍するプロフェッショナルから指導を受けられる全

部で6つのプログラムを実施予定です。

さらに、親子で観劇・鑑賞しやすい環境を提供するような取組も行っております。

続きまして、人材育成の充実についてです。アートマネジメント人材海外派遣の拡充や、タレント・トーキョーのミートアップ・サポート・プログラムなどを行っております。

来年度以降に予定されている事業としまして、令和9年の国民文化祭がございます。先頃、東京で開催することが決定いたしました。準備期間が大変短い中ですが、同時期に都が実施する様々な文化事業を連携事業として位置づけて、国や福祉局と着実に準備を進めてまいります。

続いて、都立文化施設の次期指定管理についてです。小部会では、アーツカウンシルを抱える東京都歴史文化財団が10年の期間で引き続き指定管理を行うのが望ましいという結論が出まして、昨年、本評議会を书面開催し報告したところでございます。今後の調整を経て、10月の都議会での議決を予定しております。

ここからは各館の展開についてです。

今年の3月末にリニューアルオープンしました江戸東京博物館は、5月20日時点の来場者数が26万人を超え、メディアにも数多く取り上げられました。何度も訪れたいくなる施設を目指します。

東京都現代美術館は、「現美のミライ」計画を今後策定する予定で、発信力のあるコミッションワークなど、次のステージへの取組を具体化します。

東京都庭園美術館は、「誰にでも開かれた美術館」の実現に向けて、公開エリアを拡大するなど、ランドデザインに基づく取組をさらに発展させてまいります。

100周年を迎えた東京都美術館は、今後実施する大規模改修を契機に、館内外の空間デザインや、公募棟の活用策等を検討します。

写真美術館は、恵比寿という立地や、館内を最大限活用した一層のにぎわい創出への検討を開始します。

東京芸術劇場は、今年度、芸術監督が初めて2人体制となりました。演劇部門に岡田監督、音楽部門には山田評議員を迎え、新たな展開をしてまいります。

東京文化会館は、大規模改修のため休館に入りましたが、その間も都内各地の文化施設と連携して事業を実施します。リニューアル後を見据えた検討も進めてまいります。

以上が報告事項となります。

続いて、議事です。

ハブ機能につきましては、昨年度も御説明したところでございますが、渋谷区神南の再開発の進捗に合わせ、施設整備に向けた検討をしてまいります。

機能イメージとしましては、現代美術館とコラボした特別展示など、最先端のアートシーンが分かるショーケース、また、CCBTの創造の場としての機能、担い手の育成・支援の機能、また、東京都各局・民間との連携などがございます。

また、ハブ拠点整備されるまでの間、導入される機能については、先行して実施・充実を図ってまいります。ARTEやATLASでの若手支援アーティストの作品展示、CCBTのアーティストフェローや、現美のコミッションワーク作品の展示などの最先端のアートシーンの発信や、START Boxや若手人材の海外派遣といった担い手育成・支援、アーティストのコンシェルジュ機能を充実させたいと考えています。

また、今年度より、生活文化局カルチャーワークスを立ち上げ、局・財団のノウハウ・リソースを全庁的に活用できるよう、相談を受け付けます。将来は、支援アーティスト・クリエイターと民間事業をつなぐハブ機能へと広げていく予定でございます。

駆け足でございましたが、資料の説明は以上となります。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、今の議事、もしくは報告に関しまして、評議員の皆様から御意見をいただきたいと思っております。

なお、宮城評議員は、時間の都合によって14時45分頃に退席される予定ですので、恐縮ですが、まず宮城評議員から何か御意見をいただけますでしょうか。

○宮城評議員 大変申し訳ありません。最初にしていただきまして。中座も大変申し訳ないのですが、非常に文化・芸術の施策が充実していることに、今、感銘を受けています。

僕としては、特に子供たちが芸術に触れる機会を様々に設けてくれていること、これが子供の数が、生まれる数、あるいは産みたいと思う人の数が増えることに少しずつつながっているかもしれないという気もしています。

ですので、これをもっと形を拡大していただけると、一言で言うと、「子供を育てるなら、東京に移住しようか」というくらいの感じになっていただけると、僕としてはうれしい。

というのは、今、そもそも子供が減る中で、教育に関して一種過熱が起こる。つまりどの家も子供がちょっとしかいないから、いる家はですね。ですから、どうしてもそこに教育に過熱が起こるといことが起こる。

この教育の過熱によって、東京で中学受験させるのは大変だという空気も今、一方にあるんですよね。その競争の中に入りたくないなというときに、芸術という一種のオルタナティブがあれば、学校の成績とか、受験ということのほかにも熱中できるものがあるという、そういう子育て環境になっていくと、中学受験は大変だから、ちょっと別の自治体で、子供を育てようかというような空気もなくなっていくんじゃないかなと思ったりしています。

劇場デビュー的な施策をもっともっと認知度も含めて広まっていったらいいなと思いました。

あと、生活文化局のカルチャーワークス、これはもう本当に画期的な政策だと思えました。今までどうしても、都に限らないんですけども、行政機関というのは、芸術文化に対する知見が一部の担当者に限定されるという傾向があったと思うんですけども、そも

そも文化というのはあらゆるものに通底しているはずなので、あらゆる部分・あらゆる場面で、何がしか文化と関係があるはずなんですよね。

ですので、生活文化局カルチャーワークスが、もっと誰もが知っている存在になっていくといいなど。常に都民誰もが知っているような存在になっていて、もうマークとか、ロゴマークとかがあって、みんなそれを覚えているみたいになっていくといいなどか思いました。

それから、僕の舞台芸術の範囲で言いますと、今、クリエイター以上にスタッフが人数が減ってきて、いわゆる人手不足で、これは大変大きな問題になっているんですね。なかなか舞台技術者になりたいという、そういう分母が増えない。

その中で、一体どうすれば、舞台に関わりたいんだけど、クリエイションの場、発信側じゃなくて、支える側で、スタッフで舞台に関わりたいんだよねという、以前はともかく舞台が好きでしょうがないから、役者をやりたかったけど、でも、役者の才能はなかったけど、でも支える側ではという人がたくさんいたんですけどね。今はちょっとそういう趨勢でもないんですね。石にかじりついて、舞台にかじりついていたいという、そういう趨勢ではなくなって条件はどうなんだとか、そんな感じになっているんですね。

そういう中で、舞台のテクニカルスタッフが、魅力ある職場という印象がちょっと薄いのが現状なので、あれはカッコいい仕事だよなというふうになっていかないかなと今思っていたんですね。

テクニカルスタッフって、超カッコよくないかみたいな、そういうムードがどうやったらつくれるだろうなんて思っていたところで、ARTE TOKYOの話が出てきて、ARTEというのはイギリスや、イギリスじゃない、ごめんなさい。ドイツやフランスだと、芸術が好きの人にとっては有名なテレビ局なので、ドイツとフランスの国営のテレビ局ですよ。

だから、ARTE TOKYOというと、NHK PARISみたいな感じかななんて思うドイツ人やフランス人もいるかなとったりしたんですが、僕はそこで思い出したのが、イギリスで僕が初め「Superdry. 極度乾燥 (しなさい)」という、あのロゴを見たときの、街中にそれが貼ってあるのを見たときの驚きなんですよ。

最初は、本当にビールがここにプロモーションをしているのかと最初に思ったんですが、そうじゃなくてアパレルだったわけですよ。あの、あれぐらいの露出というかが、もしこのARTE TOKYOで行われたら、圧倒的にかっこいいというイメージになるんじゃないかと思って、そこでさっき申し上げたテクニカルスタッフがカッコいい仕事だと思われるということと結びつくような気がして、つまり単純に言うと、このARTE TOKYOのロゴの入ったスタッフ用のTシャツやトレーナー、あるいはウインドブレーカーのようなもの、こういうものを例えばアパレルのワークマンさんみたいに、そういうところとタイアップで大量に、それが東京で演劇、ないしは舞台の仕事をしている人たちに着

用されていると、みんなあのかっこいいウエアを着てるぜみたいな、ちょっと見ると、あのかっこいいウインドブレーカーを着ているの、ああいうのを着てみたいななんて思うような、そういうアパレル方面からのARTE TOKYOの拡散というのが行われたら一石二鳥というか、ARTE TOKYOというものも広まるし、さっき申し上げた、舞台スタッフがカッコいいじゃんというイメージのほうにもつながってくれやしないだろうかとなんてことを思いました。

ちょっと長々としゃべってしまいましたが、以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

各評議員には、できましたら2回ぐらい御発言願いたいので、今、恐らく宮城評議員のは2回分を使ったと思います。

それでは、次に片岡評議員、よろしくお願いたします。

○片岡評議員 はい、よろしくお願いたします。

私もすばらしい、多様な文化プログラムを実施されていらっしゃるなと思いましたが、3点コメントさせてください。

1つは人材育成に関するところです。とりわけネットワーキングのための派遣ということとは非常にすばらしい事業かなと思いますけれども、これは行ったときにはものすごく刺激を受けるんですけども、帰ってくると日常の仕事にまた戻ってしまうということがあって、行った人たちをフォローアップして、派遣での経験がどこにつながっていったのかを調べ、そこから何か派生したいのであれば、そこにまた支援をするというような、複数のレイヤーにのっとった支援があるといいのかなというふうに思いました。

それから、宮城さんがおっしゃったように、キュレーターやプロデューサーに限らず、やはりファンドレイジングとか、プロモーションとか、オーディエンス・エンゲージメントのような美術館を支える、文化施設を支える多様な専門人材が必要だというのは、今やっと言われ始めていて、そうした人たちが全く育成されていないので、その辺りも強化されるといいかなと思いました。

それから、2番目はTOKYO ATLASなんですけれども、これはARTE TOKYOが都市全体の文化事業の広がりを見せるものであるというときに、非常にたくさんの事業が行われる中で、何を見に行ったらいいのか分からなくなってしまうというようなこともあると思いますので、その中では、TOKYO ATLASは目玉商品の1つだと思うんですね。

なので、これもARTE TOKYOが継続するのであれば、TOKYO ATLASも、できればトリエンナーレのような、定期的に来るものだというような名前がどこかにつくといいのかなと思っていて、継続されていく必要があるかなと思いました。

それから、3番目は人材育成にもちょっと関係してくるんですけども、東京芸術劇場に新たな芸術監督が就任というのを見て、東京都の美術館の館長のポジションは、これま

でビジネス界からいらっしゃっていることが多くて、その方々に問題があるということでは全くないんですけれども、館長のポジションが美術館の国際外交の役割を果たしているということも考えると、実際、国際的な美術館における館長だけの会議などもあって、そこで様々な情報交換をして、巡回展の話をしたり、共同制作の話をしたりするので、やはり将来的には、このポジションは美術の専門家、あるいは妹島さんのように国際的な文化人に就任してもらえるといいのではないかなと思っています。そうした国際的なネットワークを持つリーダーの育成についても、日本には館長を育成するような講座のようなものはないので、みんな学芸員の延長線上で、何となく館長になっていきます。全く違う仕事だと思えますけれども、経営や管理などマネジメントも含めた研修もあまりないので、そうした人材育成も御検討いただけるといいかなと思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、妹島評議員、よろしくお願ひします。

○妹島評議員 それでは手短にお話させていただきます。まず庭園美術館についてですが、この二・三年、この場でお話させていただきましたグランドデザインが順々に実現されてきており、私としてはすごくうれしく思っております。美術館に回遊性がつくられ、非公開だったところの公開が少しずつ始まり、そして、目黒通りに面してお客様をお迎えするウェルカムゾーンが整備されようとしております。庭園美術館を、大切に保存しながら同時に人々に開くということが、うまく進んでいるのではないかと感じております。いろいろありがとうございます。

2点目は、去年も話が出ましたが、近現代住宅建築を文化的に活用していこうという点についてです。今年から具体的に始まりそうで、すばらしいと思います。それはカルチャーワークスにつながるのではないかと思います。東京都内のいろいろなところに散らばって地域と結びつき、地域を活性化する。そこに時間が持ち込まれ、生活と密着した動きになると思います。

それからもう一つ、最後にお話に出ましたハブということですが、現在いろいろなプログラムが用意され、さまざまな文化的活動が非常に活発になってきていることを感じますが、やっぱり分かりやすくするために、それが見える形のハブが作られるのはとても重要だと思います。ご説明では渋谷ということでしたが、もう一つ築地跡地、東にあったらいいのではないのでしょうか。江戸と東京という話もありますし、ちょうど築地跡地は浜離宮庭園が隣にあって、さらに東に行くと、江戸博につながります。水のネットワークも渋谷より感じられますよね。渋谷が東京の1つの現代的な場所だとして、築地あたりはオフィス街と江戸の趣が強く混じり合いながらもう一つの特徴的な空間を作り上げている。そういう2つをハブとして発信したら、都民はもちろん、外からいらっしゃる方たちみんなにもすごく分かりやすい、みんなに喜んでいただける場所になるのではないかと感じます。

○青柳会長 ありがとうございます。

確かに浜離宮の辺りは、ウォーターフロントと考えると、19世紀の後半ぐらいからなんだけど、日本はもう17世紀からね、ウォーターフロントをやっているんですね。これはすごいことだと思いますね。

○妹島評議員 あそこは昔の雰囲気を残しながら、自然の海水が入ってきたり出たりという、そういう本当に他にはなかなかない素晴らしく魅力的なところだと思うんですね。

○青柳会長 ですよ。ありがとうございます。

日比野評議員、よろしくお願いします。

○日比野評議員 よろしくお願いします。

生活文化局カルチャーワークス、これはすごい楽しみであるし、これからとても成長すべきものだなと感じております。

文化芸術というものが文化芸術のためだけじゃなくて、いろんなものに接続する。社会的な課題を解決するきっかけとして、文化芸術を取り入れていくということが、この生活文化局カルチャーワークスができるんじゃないかなという気もします。

東京、行政の中に縦割りでいろんな局があり、その対象となっているのは都民であったり、市民であったり、その人たちの生活というものを豊かにしていく、最近、ウェルビーイングという言葉がありますけれども、人間が抱えている問題というものを、人間の心を動かす芸術文化というものがしっかりとアタッチして、展開していくことにより、各部署が抱えているいろんな課題というものが、芸術文化をきっかけにして前に進めることができるんじゃないかなと思います。

そして、そういうものを今度、生活文化局のカルチャーワークスが、もっともっとそれをアピールする、全庁内にアピールすることを、例えば国文祭が来年東京都で行われるということで、既存の、既にたくさんたくさんやっている東京都のアートプログラムというものを束ねて、国文祭というふうに出すときに、国文祭、いわゆる芸術文化の評価、芸術文化をやることによって、都民の生活がウェルビーイングに向かっていくんだという、その評価というものを発信していくような、そんな機能が生活文化局カルチャーワークスでもできるんじゃないかなと思いました。

先日、片岡評議員も出席していたマンチェスター大学が行っている文化芸術、まさに文化芸術と、病院と福祉とが一体になって社会的処方を行っていくという先行事例のシンポジウムがありました。そこに東京藝術大学が今絡んで、先行事例のマンチェスター大学の取組を取り入れていくんですけども、国民文化祭の中においても、今年、京都、そして昨年、長崎、その前が岐阜県ということで、文化的処方というキーワードで、各開催の都道府県、そして都道府県の国立大学と連携して、文化的処方を実践したり、育成する人材のプログラムをつくったりしてきました。

なので、来年行われる国文祭、国民文化祭の中でも、文化庁が主催となるプログラムですけれども、東京都が実際にやっているものを生活文化局カルチャーワークスが、社会的な課題を解決という、そういう評価もできるんだというような、そんな発信の仕方ができると、東京ならではの国民文化祭という見せ方も、既存のものを活用しながらできるのではないかなと思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、オンラインで参加の評議員の方々をお願いしたいと思いますが、まず秋元評議員、よろしくお願いします。

○秋元評議員 よろしく申し上げます。

非常にまとまっていて驚きました。あれだけ大きな大風呂敷をちゃんと畳めているというのが感想です。

ただ、心配なのが、やはりこれだけ皆さんが丁寧につくってきたプロジェクトをどう一般の皆さんに伝えるかと。この広報というか、宣伝ですよ。ここに一番のポイントがあるんじゃないかなと。

大学もそうですけれども、行政がやっていることとか、とってもいいことをやっている、もうきっちりしているなど。それをただ伝えるのが苦手だと、いつも思っています。ですから、これをこんなことをやっているんだということをどれだけ分かりやすく伝えられるかということが次のポイントだと思います。

もう1つは、これが継続的に続いていくプロジェクトだとするのであれば、そこに全部計画どおりにはならないと。この計画どおりにはならないというところの面白さ、これを面白いというふうに捉えることが大事なんじゃないかなと思うんですね。

以前にもお話ししましたが、アルゼンチンにカミニートという漁村がありまして、これはタンゴ発祥の地らしいんですが、そこは小さな漁村なんですが、屋根とか壁がパステルカラーですごくきれいなんですね。淡いピンクや淡いグリーンや淡いブルーや、すごくきれいだ。ところがよく見ると屋根の半分だけ淡いグリーンとか、半分だけ淡いピンクとか、もうばらばらなんですね。「それは何でそうなんだ」と聞いたら、「漁師の皆さんが自分の船の塗料が余ると自分の家の壁や屋根に塗る」と。つまり作為的ではないそこには文化とか芸術が生まれているんじゃないかなと思うんですね、計画されないというか。多分、漁師の皆さん、そういうまちづくりをしようと思ったわけでもなく、自由にやっていたら、結局そこが観光名所になるぐらい美しいまちになったということだと思うんです。ですから、我々はこのプロジェクトを通じて、変化していく東京都、これをどういうふうさらにブラッシュアップしていくのか。そこが、つまりちょっと計画とはずれたなとか、計画からはみ出たなとか、思うようにいかないなということをさらに面白がって、それも含めて、次のステップに行くまでの道筋だと思えるかどうか。

だから、これからの進行がすごく楽しみなんです。この思いどおりに計画書どおりに進んでいたら、多分、そこには面白みがないんじゃないかと。つまりある種、時代と合気道するというか、こういうふうに入ってきたので、それを逆手に取って、こうしようとか、文化芸術、あるいは、都民の皆さんと対話するかのよう、生き物だと、このプロジェクトは、ということがとても大事なんじゃないかなと思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に是枝評議員、よろしくお願いいたします。

○是枝評議員 よろしくお願ひします。お疲れさまです。ちょっと伺えなくて申し訳ありません。

資料も拝見させていただいて、気になったところを少し触れさせていただきます。

ARTE TOKYOは、僕が評議員になる前からもうこれは走り始めておまして、あまり具体的な提案という部分に至っていないんですけども、コアプログラムの中に、いわゆる映画が含まれてなくて、この間もその確認をさせていただいたんですけども、パートナープログラムの中で、何か映画に関するプログラムというのを実施することだけはお伺いしたんですが、まだちょっと具体的な話をお伺いできていないので、どんな形になるのか、もしお分かりになった段階でお知らせいただければなと思っております。

いろんな催物があると思いますけれども、先日まで行っていたカンヌの映画祭だと、レッドカーペットばかりが目立って来ますが、とても映画祭的なのは、海辺の屋外の映画上映なんですよ。波打ち際で毎晩夜の9時から、入場はただなんですけども、毎日毎日そこで屋外上映が行われています。子供たちを呼んで、映像に触れてもらうには、多分、そういうイベントが一番いいのかなというふうには思っているんで、今からどこまでそういう展開が可能なのか分からないんですけども、ちょっとぜひ検討していただければなと思っております。

あとこの3年ほど、福岡のほうで映画祭のアドバイザー的なことをしているんですけども、そちらは地元の商店街と連携して、ちょうどそれは映画祭の時期がクリスマスなものですから、子供たちにクリスマスプレゼントということで、いわゆる養護施設の子たちとか、生活保護世帯の子たちにチケットを配付する形で、この食堂はただで食べられるよという形で、食と映画というのを結びつける形のイベントにしているんですね。久しぶりに家族で外食をしたという子たちと一緒に僕もそこで御飯を食べましたけれども、何か食と結びつける形で、ふだんこういう芸術に触れるチャンスのない子たちを、ぜひこの期間、会場に呼んでいただけるような、そんなイベントになるといいなというふうに感じます。

自分が関わっているところに関して、ちょっとだけお話をしますと、今、子供の文化体験の充実ということで、「映画とわたしの5日間」というのを僕と僕の周りの若手のスタッフとで取り組んでおります。去年は夏やりまして、あまりに暑くて、子供たちの健康不

安もありまして、今年は6月、もう来月になりますけども、させていただきます。またここでも報告させていただきます。

上映会も含めて、とても子供たちが映像づくりというものに関心が高いというのも実感しておりますし、継続して、ぜひ展開していただきたいなというふうに思っておりますが、今はかなり無理を言って、撮影場所に都庁を使わせていただいているんですね。本当にそれはそれで多分御負担も大きいでしょうし、大変だと思うんですが、子供たちが都庁というのをどういうふうに見ているかというのが結構面白くて、都庁を何かに見立てるんですよ。都庁の階段とか入り口とか、何かに見立てて、映像にしていくんですけども、もしこれ、先日もちょっとお話しさせていただいたんですが、表参道、神宮前のこどもの城の再開発の話を僕は評議員になってからずっとさせていただいているんですけども、担当が都市整備局と財務局ということで、ちょっと部署が違うのかもしれませんが、神宮前五丁目地区まちづくり方針の中に、あのこどもの城を知の創造拠点として再構築していくという文言が昨年4月策定された方針の中に書かれているようで、一番いいのは、ああいう場所で子供の映画教室を行って、上映まで一貫してあの中で行えると、とても文化発信基地として、あの場所がもう一回生き返るのではないかなというふうに考えておりますので、ちょっと縦割りを越えて、ぜひ迅速に進めていただければなと思っております。

もう1つだけ、人材育成の充実のアートマネジメント人材の海外派遣とタレント・トーキョー、こちらも少し御協力させていただいているんですけども、これはとてもすばらしい取組だというふうに実感しています。タレント・トーキョーに関して言うと、この卒業生が国際映画祭で実績をつくり始めているので、その人たちを今度は講師に迎えて、新たな人材を育成していくという循環が生まれつつあるので、これはやっぱり10年・15年・20年続けていくと、そういう循環が生まれていきますので、ぜひさらに展開していただければなと思います。

参加者のヒアリングをきちんとして、フィードバックをして、何が足りなかったのか、もっとこうするべきだということに参加者からの声を吸い上げる形で展開を考えていければなというふうに考えていますし、これは参加して終わりではなくて、一番いいのは、ここで参加した経験を、例えば映画に関しては、東京国際映画祭のスタッフとして彼らを受け入れて、映画祭の充実のほうに今度そこも循環させていくということができると、映画祭のいろんな哲学が共有されますし、今、常駐スタッフがいない状況であるという異例の事態ではあるんですけども、そういう形で働き口と言っちゃうとあれなんですけど、経験を生かせる場所というのをやはりこちら側でも用意してあげるというのが参加者のモチベーションを上げるためにもいいのではないかなというふうに思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に芹澤評議員、よろしく願いいたします。

○**芹澤評議員** こんにちは。今回のいろいろな計画を拝見しまして、以前から私がお願いしていた子供たちに本物に触れていただける機会をとということで、そういったことで大変に評価できるプログラムが選定されたなど大変喜んでおります。その中で1つ、ちょっと先ほどの宮城評議員の御発言で気になったところがありまして、今現在ですけど東京で子供をつくる、あるいは東京に引っ越してくることによって、子供の受験が大変になるんじゃないかという親世代の何か懸念とかがあると伺ったとき、少なくとも子供が小さいうちは受験の話が、前は最近の若い人の意見を聞きますと、保育園無料とか、いろいろ小池都知事の、これは文化政策ではないですけども、そういった政策によって、東京と、それからすぐ隣の川崎とか、そういったところより東京で子供を産んだほうがいいんじゃないかという、そういう動きがあると伺いましたが、受験についても本来でしたら学校が受験生の中で大体同じようなレベルの子供たちの中から選ぶというときに、もう少し文化度というか、あるいはそういう一般教養的な、そういったものもテストで何とか入れていけないかと。そうすると圧倒的に小さい頃からそういった体験していた子供たちのほうが強くなると思っています。

それをどうやって文科省とか、いろいろなところを巻き込んで、そういうもっと総合的な人間をテストするというのは難しいとは思いますが、そういった方向に向かえるとよいかかなと思っています。

ただ、そうすると、今度はそれを見られる先生たち、あるいはそれを育てられる先生たちの教養とか文化度の問題も出てくると思いますので、その辺が次の課題となりますが、先ほどあったように、人材育成の中で、そういった専門的な知識とかをお持ちの方を学校に少々派遣するとか、そういった形で文化とか一般教養とか、そういったことの教育も入れることができたかなと思います。

それと、もう1つは、是枝評議員のおっしゃっていた映画祭に臨時スタッフとしてということがあるんですが、これも何かフランスの例ばかりで恐縮なんですけど、フランスでは、企業でも、あるいはこういった映画祭とか、アートのトリエンナーレとか、何でもトレーニー、日本で一般的に研修生というと、ちょっと何かぼんやりするんですけども、いろいろな分野の学生さんたちをそういった短期間で1か月・2か月・3か月、そういった単位で雇うことが多くて、もう少しそういったことが日本でも一般化すると、若い人たちの刺激になるのかなと思っています。

以上でございます。

○**青柳会長** ありがとうございます。

それでは、次に、松任谷評議員、よろしく願いいたします。

○**松任谷評議員** よろしく申し上げます。

僕は、この間、初めてARTEという名前を伺って、まだそういう意味ではARTEという言葉があまり認知されていないというか、これを今後どういうふうに認知させていく

んだろうなというところがすごく重要な気がしました。何となく僕が受け取っているイメージは、育っていく芸術祭、動いていく芸術祭ということのかなと何となく思っていて、何かそういうものが見えるような打ち上げ花火じゃないですけど、最初のインパクトを与える何かイベントはあってもいいのかなと思いました。

それと、幾つかリバイバル作品を展示するという事なんですけれども、過去にそれを御覧になっている方もいるわけで、「あれ、またやるの」みたいなふうに思われる可能性もあるわけで、そういうことを考えたときに、いや、あのときに見たあれと今回見たこれは同じでも、つまり見え方が違う、時代が違う、時代が違うものの中に置いてみるとこう見えるというような、何か逆に言うと、タイトルをつけてしまう。「あのとき見た夢」とか、「いつか見た夢」とか、タイトルをつけてしまえば、きっと同じものを見ても、ああ、あのとき見た夢が今また本物が見られているみたいな。そうすると未来はどうなっていくんだろうみたいな、そんな何かARTEというものが動いている動的なイメージになっていくといいなと、何となく思いました。

僕は以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に山田評議員、よろしく願いいたします。

すみません。宮城評議員はお時間だったので退席なさっております。

どうぞ、山田評議員。

○山田評議員 全体を通じて、大変すばらしい文化政策だなと感心しておりまして、大変に世界に胸を張れる、誇れるレベルのものであると思います。

それで、ARTE TOKYOというお話もあるんですけど、まず、ここの分野に音楽と書いていないのがちょっと寂しいなと思いました。

そして、世界でも東京でしかやっていないものというのを押し出していくということが1つポイントになってくるのかなと思うんですね。私の分野でいいますと、例えば、オーケストラですと、世界の中でオーケストラが一番ある都市というのは東京になるんですね。それはベルリンでも、ウィーンでも、パリでも、ロンドンでも、アメリカでもなくて、東京なんですね、数の多さでいうと。だから東京は世界有数のオーケストラ都市、音楽都市と言っていいものですから、その辺りですとか。公的なものもそうですし、民間でやっているものでも、世界で東京しかないものというのが多分あると思うので、その辺りを売り出して、押し出していけたらいいんじゃないかなというふうに思いました。

そして、その音楽にも関連するんですが、江戸文化の魅力の発信というところで、江戸文化というと、どうしてもオリジナリティー、オリジナルの“昔こうだった”ということの再現とか、そういう発想になりやすいんですけど、結果的に19世紀中頃のジャポニズムで、やっぱり江戸の文化が世界に影響を及ぼしたということが多大にあるんですね。その辺りの紹介という意味では、音楽も関われるかなと思いました。ちょうど江戸文化、

歌舞伎の発祥とオペラの発祥が同じぐらいの時期ということなどもありますので、何かそういう“オリジナルの文化がどうだった”だけではなくて、世界に影響を及ぼした江戸文化、という見方もあったらまたさらに広がるのかなと思いました。

あと指定管理のお話がありますが、私もこの4月から東京芸術劇場の芸術監督にさせていただいて、ちょっと関わっているんですけども、歴史文化財団の指定管理になっていくということで、1つ、東京都の皆様にお願ひがありまして、都からの派遣でこられる職員の方というのがいて、東京芸術劇場の場合は、それが管理課長とか、そういう立場の方になるんですけども、どうしても循環の巡りが速いのですね。短いと1年で替わられてしまったり、長くても2年だったりされるんですけど、そうすると、ちょうど分かった頃にお辞めになってしまうということになる。そうすると、こういう文化政策の歩を進めたり、改善していくのに非常に困っております。その辺り、もう少し長いスパンで、職員の方の派遣をお願いできたりしないかなということが1つあります。これは、先ほど宮城さんがおっしゃった舞台技術者の不足であるとか、現場の声をどう吸い上げていくとか、そういうことにもつながってくるのかなと思いました。

そしてすみません、もう1つだけ。文化戦略2030ですから、2030年までを見越して考えたときに、東京や近郊のコンサートホールというのが軒並み（改修で）閉館になっていくんですね。大変集中していて、来年・再来年辺りがもうほぼ（主要なところの）半数以上閉まってしまうという現象になっていて。うちの東京芸術劇場は開いている、オープンしているほうになるんですけども、その状況をお互いにヘルプし合うときに、どうしてもやっぱりルールのこととか、人とお金をどう工面するんだという話になってきます。その辺りも、ぜひ東京都の皆様の御協力をいただけたら、さらに文化が広がっていくんじゃないかと思ひます。

すみません。だだ一つと申し上げましたが、以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、一応、皆様に御意見をお聞きしましたが、ここで何か特に付け足しておきたいということはございますか。

（「なし」と呼ぶ者あり）

○青柳会長 じゃあ、私も、今お聞きして、やっぱり循環とか世代交代とか、それから、更新とかということで、だからやっぱり都市というのは1つの生命体みたいなもので、だから生命体の中で、骨格が交通機関とか道路だとして、それで筋肉がビルとか何とかだとすると、恐らく文化芸術というのは、ビタミンとか、あるいはホルモンの役をしているんじゃないかと。そのことによって、生命体が活気を持って動いていくと。しかも、生命体だから年を取っちゃいけないから時々更新しなくちゃいけない。そのことをこういう我々今やっている文化評議会の中で意識的にできて、今回もARTEのようなものが実現しつつあるということで、すばらしい方向に行っているんじゃないかなと思ひますので、今後

ともどうぞよろしくお願ひいたします。

ちょっと私のあれで、時間が押してまいりましたけれども、ここで知事のほうから一言いただけますでしょうか。

○**小池知事** それぞれやはり現場ならではのといひましようか、そしてまた非常に世界、そしてこれまでのいろいろな流れを踏まえた大変貴重な御意見ばかりいただきまして、本当にありがとうございます。

ちょうど今、この手前で02という、これまでの文化施策の経緯というのが出ていたんですが、ちょっと映してくれますか。02番ですね。02。これまでの文化施策の経緯ということで、今、ARTE TOKYOやTOKYO ATLASに対しての様々貴重な御意見いただきました。この四・五年だけで振り返ってみましても、五・六年か、2020大会のときはコロナに直撃を受けて、あそこは文化のいろんな発表などを含めて力を込めていたんですが、まさゆめくんもなかなか「こわきも」、「きも」何というんですかね、私は好きなんですけれども、それとか、あれは上野でロボットが石庭を造るというのがあったりして、いろいろ工夫を凝らしていたんですが、結局、日本のメディアが伝えたのはコロナの感染者数の推移ばかりで、こういうのが全く飛んでしまって、もうへとへとになって、家に帰ると、BBCがちゃんと石庭のことを伝えてくれていたり、おっしゃるように、ARTE TOKYO、これからどんどん力を入れていくわけですから、それが世界に、また国内にしっかりと認められるように、面白いねとか、参加したいねといったようなムーブメントにぜひ持っていきたいと思っております。そこで皆様方の御協力をまた引き続きよろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

幾つかヒント、アイデアも頂戴をいたしました。そうですね。行政として、きちっと、かつつと、予算も含めてやるのが使命ではありますけれども、文化の特性や伝わり方も含めて、思いがけないことで大ヒットになるといったようなことを、そこを皮切りにして、全体が分かってもらえる、楽しいねと通ずるような、そんなのりしろも含めて、何というんですかね、着物でいうとわさというんですかね、何かそういうのも含めて、それが文化の楽しみだということで伝えていきたいと思っております。

いろいろ音楽とか映画とかが抜けているという御指摘もございましたが、もう芸術という範疇で全部カバーしていると、このように思っております。ということで、この間、五・六年の間も、いろいろ文化的なプログラム、まだまだ完全燃焼していない部分や悔しい思いもありますので、それをむしろエネルギーに変えて、皆様方と共に進めていきたいと思っております。

どうぞ引き続きよろしくお願ひいたします。

○**青柳会長** ありがとうございます。小池知事、ありがとうございます。

これにて、第42回の東京芸術文化評議会を終了したいと思います。

今日はありがとうございました。

以上